

# 装丁の話

53期生

## I テーマ設定の理由

自由研究では、自分でもよく知らない身近なものをテーマにしようと思っていて、家にある文献をみていたら、この「装丁」を見つけた。もともと、本のカヴァーや表紙のきれいで、こった絵や紙は気にして見ていたので今回調べてみようと思いました。

## II 研究方法

### (1) 文献調査

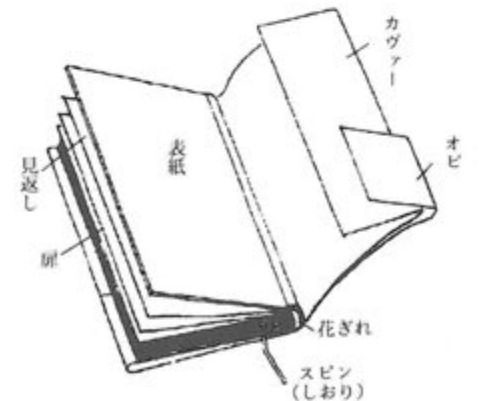
## III 研究内容

### (1) 「そうてい」の漢字

「そうてい」は装丁や装釘、装幀とも書きます。どれが一番ただしくて、どれがまちがいということも特にないようだし、各出版社でも統一はしていないようです。でも、今まで、本を見ていたら「装幀」というのがほとんどでした。反対に「装針」というのは今まで、あまり見たことがありません。たしかに「針」という字を使えば、何だか、本にカンカンカンと針を打ちつけるような気がしているのかもしれない。「丁」はシンプルでいいのですが、丁の字は針の象形文字なので、やっぱりカンカンカンという漢字なんです。岩波の『広辞苑』には〈本来は装<sup>い</sup>訂<sup>め</sup>める意味の「装訂」が正しい用字〉と書いてあるのです。なんでもとの字を使わないのか。どおして「装丁」や「装幀」なんて書き方があるのか。といった疑問がうかび、おどろきました。しかも〈「幀」は字音がタウで掛物の義〉とあったので、さらにおどろきました。今まで見てきた「装幀」という漢字は音も意味もまちがっているわけですから。というわけでここでは、字画がすくなくて書きやすい「丁」を使うことにしました。

### (2) 装丁の意味

「装丁」といってもきっと、なんやねんと思う人がほとんどだと思います。では、意味を説明します。しかし小さな辞書で「装丁」としらべたってそこにのっている意味は、装丁のほんの一部です。これが立派な厚い厚い辞書になると、装丁の深いところまで書いてあり、図までのっているのです。〈書物の表紙、見返し、扉などの体裁から製本材料の選択までを含めて書物の形式面の調和美をつくり上げる技術〉というのが「装丁」なのです。



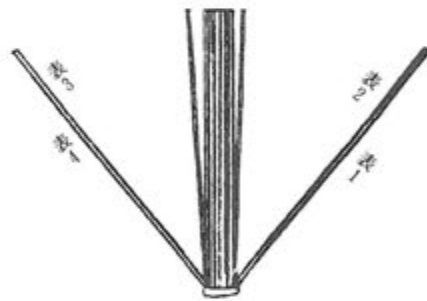
### ①カヴァー

カヴァーというのは昔はなかったのです。表紙があればそれでよかったですし豪華な本は箱に入っていました。カヴァーがかけられるようになったのがいつかはわかりませんが、一冊につき印刷部数が多くなったり、出版される本が多くなってからだといいことです。カヴァーの役目は二つあります。一つめは、よごれから表紙を守ることです。書店においてあれば、当然ほこりをかぶったり、人の手のよごれがついたりします。だからよごれた本だってカヴァーさえとりかえれば、また新品として出荷できるのでお得なのです。二つめは、本を目立たせることです。各出版社でできるだけきれいな、こったものにしてあります。そのおかげで、私は本をカヴァーを見て選ぶことであるのです。しかしここで問題が一つ。コーティングです。コーティングは上から模をはってよごれをふせぎ丈夫にするわけですが、熱処理のためせっかくかいた絵や紙の感じがへんになることがあるのです。しかし色がこくなるならもともとの色をうすくするという対応がされています。

### ②オビ

一番外側についているとりはずしのできる細い紙がオビです。オビは昔はなかったのです。カヴァーがいくら当たり前になってもオビは特別な本にだけにつけられていました。そこで、オビをつけると「話題の本」「人気のある本」と思われるのを利用して、どんな本にもオビがかけられたのです。今では、オビがあるのは当たり前で、オビがないと欠陥商品だという人もいます。

### ③表紙



本のオビカヴァーをはずしてでてくるのが表紙です。表紙は前から表1、表2、表3、表4と言います。表紙は、本の内部を守るためにあります。このごろは、カヴァーを目立つようにと、きれいなものにし、表紙は、題と著者名などの文字だけの一色または二色にするという本が多いのです。しかし、表紙も立派な装丁の一部なので、絵・写真がのった楽しい表紙もたくさんあるのです。

### ④見返し

本の表紙の裏に貼っている布や紙のことを見返しと言います。見返しには、写真やカットを入れることもあります。けれど見返しは無地の方がおちついていいという考え方もあります。

### ⑤扉

見返しの次のページ、書名や著者名、出版社などを記したページを扉と言います。扉にもカットを入れることもあり、そのカットのことを扉絵と言います。そのままです。扉の絵というのは、節約して本文用紙といっしょにするということもありますが、ほとんどの場合は別の紙を使います。

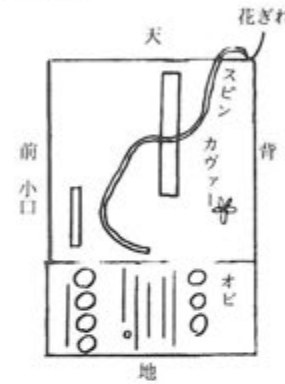
### ⑥花ざれ

本の上下両端に貼りつけた布のことを花ざれと言います。昔は糸を折り丁にぬいつけ本を丈夫にするもののことをいいました。はっきり私も今回はじめてこの存在に気づいたほど目立ちませんでしたが、しっかりと本を丈夫にしているのです。

### ⑦スピン(しおり)

本の上についているひらたいひものことです。スピンとは、急ブレーキをかけた時に自動車の後輪が空輪して回ることをいっているのかというのはわかりませんが役目としては読みかけの本にしるしとしてはさんでおくということです。

### ⑧小口



本のページがとじられている。本のせなかを背と言います。背には花ざれやスピンといったものがあります。そして背の反対側を前小口と言います。本の上の部分をつまの部分を地と言います。背をのぞいた三方の天、地、前小口を合わせて小口と言います。本を本だになおす時はちゃんとねかさずにたてて、背を見えるようになおすと思いますが、たながいっばいとか、なおすのをわすれていると、全然大きさも種類もちがう本がよこになって、積みあがっているという状態になります。そんなときどの本か、すぐにわかるように小口に題名、巻次などをしたのです。そのことを小口書と言います。

### ⑨本文

文書、書物の本体をなす部分のことをいいます。

### ⑩のど

書籍のページの綴じ目に近い余白の部分のことをいいます。のどの反対が小口になるんです。

### ⑪ノンプル

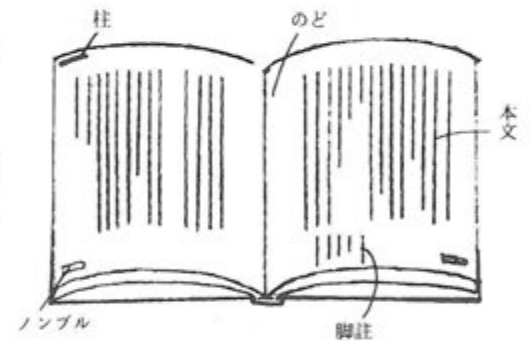
ページの順序を示す数字です。

### ⑫註

本文の説明として書き入れた文句のことです。ふつう巻末にまとめて入れるか、各章の最後に入れていきます。

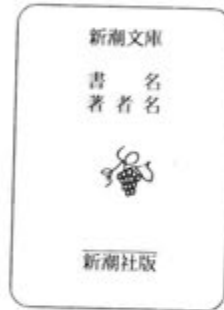
### ⑬脚註

本文の下に書かれた文のことです。わたしたちは、教科書で新しい漢字や言葉の意味なんかを書いてあるのをよく見ます。しかも脚註は映画の本にうまくつかわれています。監督や出演者、カメラマンなど、また本文だけじゃ映画に対する想いが書き足りなくて補足として、脚註をつかったりします。その場面の簡単な説明をかいたり、写真までつけたりして、興味のある人はよりいっそう楽しめるし、興味のない人はよまなくても差しつかえないわけですから、とってもいいです。



(3) 文庫について

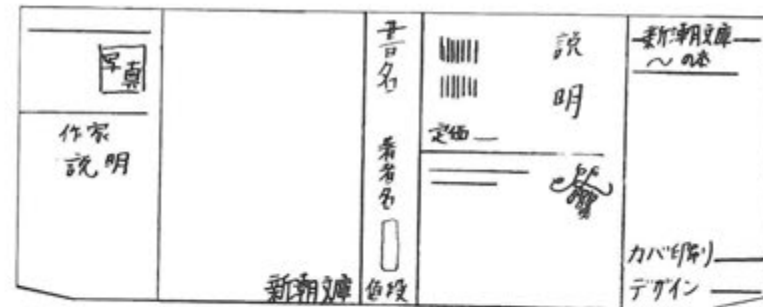
文庫本というのは単行本と中身は同じでも性質の違うものです。もともとはできるだけ本を安く作って安い値段をつけて、たくさんの人に読まれるようにする、という目的で作られた形式ですから、美しさとか洒落っけよりも実質を貴ぶものでした。そんなわけで文庫本にカバーなんてなかったんです。同じデザインの表紙で書名、著者名の文字だけを刷りかえるというスタイルのものだったんです。ですから表紙にはどんなタイプの内容がきても合うデザインが採用されています。日本の古典文学がきても、翻訳小説がきても、童話がきても困らないデザインにしています。地紋のようなものとか回りを囲む飾り模様のようなものとかです。ところが実質本位だった文庫本も出版社間の競争力激しくなると、個別化をはかるようになります。文庫の表紙ってほしい一色刷りの地味なものですけど、それにカバーをかけて立派に見せる。そうすると値段はちょっと高くなりますが、その方が売れる時代になったのです。今は文庫でもカバーがかかっているのはあたりまえになっています。けど、カバーをはずせば昔ながらの表紙があらわれるのです。文庫はカバーで勝負なのです。表紙は、統一デザインだし、文庫本に見返しはありません。扉は本文用紙が使われていて、デザインも共通のものでした。だから、文庫は装丁とはいいいにくいわけです。けれども文庫のカバーだって充分にきれいでこったものがあって私は好きです。カバーの表は基本的には自由にデザインできますが、何々文庫という文字やマークがかならず入ります。しかもその書体、大きさ、位置、色がもともと決められています。次にカバーの背はどうなっているかというところ、作家を識別するために背の色を作家ごとに変えられているというケースが多いです。中には趣味が悪い色にされる作家もいるのです。カバーの裏も今や統一されています。作品の説明が数行入るといってお決まりパターン、さらにバーコードが入るようになりました。かつては、裏もデザインできたんです。それで、表と裏で1つの絵になるものや表が正面の姿で裏が後ろ姿とか表は物語のはじまりの絵そして裏はおわりの絵というふうに表と裏をうまく使ったデザインもたくさんありました。ところが、いつのまにか裏は説明を入れるというシステムが取り入れられていて、裏の絵が消されていたということもあったのです。こういうのはとっても淋しいことだと思います。表だけだと何んも面白いことないです。私だって本をえらぶときは、説明を読んで決めていたので、文庫の裏の説明はいるものだと思っていたけど、そんな表と裏をうまくつけた絵があるのなら、絵のほうがいいと思います。だって文字でかいた説明よりも絵の方がいろんなことを想像できて、それに見た目でいいですから。



新潮文庫の表紙  
左(表) 右(裏)



新潮文庫の扉



新潮社文庫のカヴァー

ほとんどの場合、単行本がまず出てからそれが文庫化されます。単行本の装丁をした人にだいたい文庫もおねがいするケースが多いです。しかし、たまたま単行本とちがうイメージでやってくれ、と注文される時があるのです。まあ単行本と同じイメージの小型本が書店にならぶよりも新しい気分の本が登場した方が楽しいかもしれません。文庫には、解説が入っています。わたしは解説も目をとおしています。だって作家さんのことが少しでもわかる気分になりますから。

(4) バーコード

出版関係のバーコードはまず雑誌に、それから文庫につくようになってやがて単行本にもつけられるようになりました。文庫の場合バーコードは裏にあってデザイナーさんたちが手がけるスペースではなくていいのですが、単行本ではちがいます。カバーも装丁の一部だし、装丁は本を美しく装うための大事なものだから、わざわざこんなものを入れる必要ないし、だいたい人はきれいなものを望むはずだ。というデザイナーさんの声もなっとくできます。それなのに本のバーコードは二段になっていて、雑誌よりも倍の大きさがある上に、位置はカバーの裏、上から一センチ、背から一センチというふうに決められているからデザイナーさんも困ってしまいます。便利かもしれないけど、美しさ、面白さがかけてしまうとちょっとやめたらいいの。と思ったりします。本の歴史文化を忘れてるような気がします。けれど最近、セロファンの上からバーコード入りシールをはる事が採用されました。はがすことができるので、装丁に関心がある人は家にかえてシールをはがしてしまえばいいのです。このことができるようになったのも、デザイナーさんたちが粘り強く話し合ったからです。デザイナーさんたちは自分の仕事にとことん一生懸命です。デザイナーさんたちの仕事に対する心いき。すごい。本当に、すごい。

IV 結論

自由研究をやりおわって、もう一度「そうてい」とは何んやと考えたら、はじめに書いてあるように、書物のオビやカバーや表紙それに見返し、扉など全部の美しさをつくりあげていくこと。というのがあらためて、理解できました。カバー、表紙にどんな色のどんな紙をつかうか。絵は、どんな画材でどんな絵をかこうか。題名は、どんな書体でどんな位置にしようか。などなど。デザイナーさんたちが、考えて、考えて、美しい本ができあがっていくのです。

## V 課題

- (1) 出版社の人から本を装丁をおねがいされてから、カバー、表紙、見返し、扉などのデザインを考えたり、紙をえらんだり、題、著者名などの書体、色、位置をきめたりして、それらを全部、印刷しとじていき、一冊の本として店に出されるまでの工夫や製本工程をもしらべていく。
- (2) カバー、表紙、見返し、扉のデザイン、紙、文字がどうその本の内容につながっていくのかしらべていく。

## VI 感想

はじめは、ただ「装丁」にかんする本を見てこれにしようと思ったので、はっきり「装丁」という意味はただ本づくりとっていました。しかも私の見る本というのは、ほとんどが文庫で、見返しなんか、その存在をしりませんでした。それに文庫は「装丁」とはいいにくいとしたときは、すごくびっくりしました。けれども、今はすこしでも本のことを理解できて、本としたしめた気分です。だから、あの時「装丁」の本と出会えたことがうれしいです。ということで、これからは、本をただよむだけでなく、オビ、カバー、表紙、見返し、扉など本全体を楽しみたいと思います。

## VII 参考文献

- ・和田 誠 「装丁物語」
- ・岩波出版社 「広辞苑」
- ・新潮文庫

本当にありがとうございました。